

二月の天地



川口孫治郎

立春の節、俗に節分又年越しともいふ、月の三日にわたる、此夕柊に鯛の頭を挿して戸口にかけ、鬼打豆を撒いて追儼の式を行ふ。

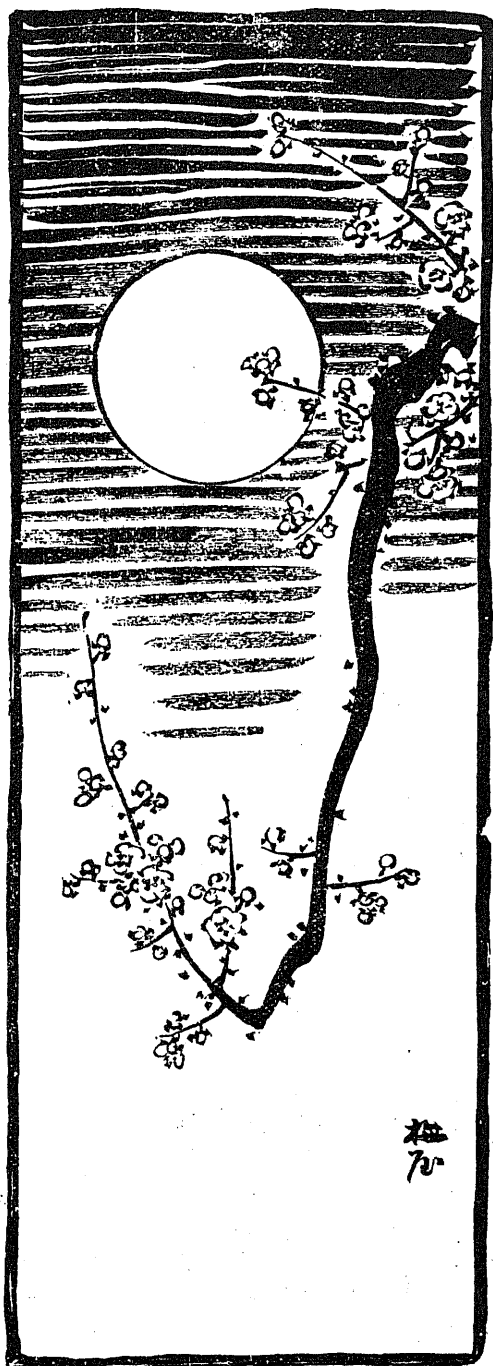
降り積もりし雪や張り渡せる氷の堅く鎖せる野に山に、折々は吹くとはなしに吹き来る東風はあれど餘寒峻峭にして、人々重裝して爐邊に集まる。子供ハ風ノ子、老人ハ火ノ子、とは素直なる隣家の子守娘が得意げに歌ふ所なり。

嚴肅なる梅、は氷雪に戦ひ勝ちて満開し、清香四郊に馥郁たり、げに花に梅あり、男子に節あり、女性に操あり、節操に飲くる處あるものは餘枝論するに足らざるものなり。白苔の蒸せる嵯峨たる老樹には繁く小さく咲き群がり、ひた伸びにのびたる若木には太く粗らに咲き匂ふ、………曉の梅、昏黄の梅、月夜の梅、微雪と梅、輕煙と梅、細雨と梅、可なり、清溪に梅、小橋に梅、竹邊に梅、松下に梅、亦可、庭前にある、廢寺にある、荒祠にある、井戸端にある、籬にある、瓶にある、亦何れか可ならざらむ、悼ましくも、昌泰四年正月末つ方、大宰權帥に貶せられし菅原道真公は住み慣れし都を後にして獨筑紫の謫所に心ならずも出で立せ給はむとする時、殘らされし稚なくおはしましける御子達の慕ひ泣きおはしけるを悲しく思

召して、御前の梅を御覽して、「東風吹かば香お  
こせよと詠ませ給ひしとかや。  
優しくも、みちの奥の木強漢安部の宗任が遙々

子梶原源太景季が、群がる敵の真中に駆け入りて、  
命の受授を太刀先に決せむと、鎧を削る奮闘に、  
簾に挿されし今を盛りの梅の一枝、風に吹かれて

五十六



都に連れられ來りて、「大宮人は何といふらむ」と

散りまがひしと聞く。

いつて歌ひ返したも、我邦の此梅の花にこそ。

チヨツと笹鳴き渡りし幽谷の鶯は、何時し

勇ましくも、源平福原城の戦に、關東勢の快男

か梅が枝に傳ひ來りて、慙しげに吃りて小聲に歌

ひ、やがて心地よげに思ひきつて朝とくより君が  
代の春を歌ひ始む。

沈鬱なる雲は晴れて、快活なる蒼空は開けたり、  
冬枯の野山に、野火のつけられて、ムラ／＼と淡  
き煙は捲き起り褐色の各山は所々黒ずみて虎の背  
の如く文をなす、こは來む夏に若草の彌茂らむ爲  
に燒きたるなり。

枯野に輝く日の光に心せよ、肌寒さ風のなほ去  
りやらぬ間にも、ソロ／＼と暖さの加はりて、枯  
芝の上よりさては瓦屋根よりチラ／＼と、陽炎の  
ゆらぎて見えそむるは、さすがに楽しくうれし。

袖ひちで結びし氷の解けそめて、春水漸く來り、  
庭の鮎子は枝垂れて白く細やかに咲き揃ひ、子  
鮎は此頃早や川口より勢よく廻り、淵に於て、淀  
に於て、岩蔭に、藻の間に、鯉鮒鯉鯪などの錯動

さ始む、蝦の觸鬚、丁斑魚の口、蟹の目、鱒の髭、  
漸く活氣を帯び、老人と猫と水龜とすら天氣を伺  
ふに至る。霜防の被をとられて草木のうれしさも  
思ひやられ、殊に黃金色に綠葉を點綴せる金柑の  
始めて長閑なる日影に照さるゝ、目さむる心地す  
咲き去り咲き來りて各種の椿は尙をちこちに見  
え、早茄子、早胡瓜、早蕃椒、細根大根など種は  
蔭かれ、木々の梢はふくらみて、總ての光景は消  
極的なる冬を離れて、茲に

積極的なる樂しき花の春に進行しつゝあるなり

左の一篇は客臘附臘幼稚園に於て、一部の生徒の會食の折り  
關根教授の演べられたるもの、有益にして面白ければ、其稿  
を乞ひ得たるなり。一月の本誌に掲載すべき者なりしを都合  
によりて、本號に載することなし。

玩具具及遊技の話

關 根 正 直

私は幼稚園の先生方やこれに御關係の皆様の前で御話をするのは誠に困却致します。と申すのはいかなる事柄をお話致して宜いやら、此の方の知識に乏しく且經驗と云ふもなし。云はい此所へてお話を致す資格のない者であります。然し中村先生から強いての御依頼につき今日參席致した次第で有ります

右申す様な譯でありますからお話の材料にも甚た窮しましたが元來私の専門は古い日本の書物を穿鑿する事を業と致しますので矢張その古い書物の中に今も行はれてゐる小兒の玩弄物や遊技の名稱や仕方などの見えてゐるのを抜きだして、古い時代から行はれてゐた事を申さうかと思ひつき

五十八

ました。是れらの事は何の興味もなく又御存知ないからとて差支もない事ゆゑ決して皆様のおために成る事でも御參考に成るやうな事でも御座りませぬ。全く責寒きでありますからさやう御承知を願ひます

(一) 獨樂、昔はコマツブリとも亦ツムグリとも申したが後世は略して只コマと云ひます。是れはもと天竺(印度)より支那に渡り日本にも來たものと見えまして古い佛經の中に所々物の譬へに引いてあると昔の學者の説もあります。吾が國でも早く小兒の翫賞したもので、今より千年も前に出來た和名抄といふ書に載つてをります。又大鏡の中にも、或る幼帝の殿中に獨樂をね廻しになつた事も見えてをります。扱コマと申す名稱はいかなる義でありましやうか。昔は支那の人を大抵高麗人と

申しましたか、此の品も彼の邦より渡來した故に高麗の義で名づけましたか、ツブリはツムクリの略轉語で、ツムクリは粒栗の義でもありまじやうか。昔の人もさう考へてをります。

(二)紙鳶 關東ではタコ、關西ではイカと呼び、文章や俳句などには大かたイカノボリとかいてあります。是れも千年前の和名抄にありますが、紙を以て鵞の形を造つて風に飛ばす事までかいてあります。今のトンビゴの類と見えて、紙鳶とかきましたが、日本では古く鳥賊の形に造つて風に飛ばさせましたからイカノボリと申すのです。徳川時代になつては、小兒のみならず大人も之を弄ぶ風になり、八つ花形、九曜星、蜈蚣の形、達磨、盃、封じ文、大黒、鬼の腕(渡邊の網の繪なるべし)土蜘蛛頼光、舟辨慶の仕掛けなど流行

した由に、其の頃の書物に見えます。私の小兒の頃は武者繪が多く行はれた様に記憶します

(三)鞠 まりといふ稱は、圓き意にて名つけたるか。此の玩具は今より千三百餘年前、推古天皇の頃に矢張支那より來たりし物と見えます。但し其の頃の鞠は、革で製り、中に毛を入れ又は糠をも入れた物で、之を蹴あげて遊戲としたので、是れは小兒でなく、大人の遊技にしたのであります。

又打毬(毬杖)とも申して、杖で打つ技もありました。が、今は皆すたれて、手毬のみ行はれます。切手毬も鎌倉時代には盛に流行しまして、將軍頼朝が家來たちを集めて度々手毬會といふを催した事が吾妻鏡といふ實錄にかいてあります。其の頃の手毬會は童男大人等が打まじつて遊んだ様に見える、童女の技ではありませぬ。慶長寛永の頃の

古書には、年若き男女數人立ち圍んで一つの毬をつきあふ様に見え、又其の毬も革ではなくて、糸で卷いた様に書がいてあります。今はゴム毬のみ行はれますから、只今の兒女は、燈心をまるめて糸でかいた事は知らぬでありますやう。私が覺えても大低手製でありましたが、今は誠に便利に成りました。

鞠の序に羽子板隻六かるたの類も正月の遊技の品であるから申しましよう。是れらは幼兒の玩具ではなく、童女少年の翫ぶものですが大略を申し上げます。

(四) 羽子板 是れは鞠とはちがひ後世になつて行はれた物の様です。それ故あまり古い書物には見えませぬ。やうく足利時代に出来た下學集といふ書に見えたのが始めて、其の頃は極粗末な板

に、殿様奥様の繪をかくを常として、其の中に精粗はあります。押繪などは無論ありません。私せうが小兒の時分には、同じ押繪ながら實盡たかづく牡丹ぼたんに蝶てふ、一富士二鷹などの繪もありましたが、近頃は皆俳優の似顔ばかりであります。是れは教育的の趣味ある繪模様のをほしいものです。

(五) 雙六 此れは持統天皇の御代にもあつたのですが、名は同じでも今のとは全くちがひます。今ある物は實は繪雙六といふが本名で、もとは今より二百餘年前に、ある僧侶が佛法の因果應報の理を、小兒に知らせんために作つたもので、賽の目の多少によつて極樂へも行かれ地獄にも落つる様に趣向を立てたもので、之を淨土雙六と申しました。之を始めとして、東海道五十三驛の道中雙六といふも出来、人間一生の事をかいて、出世雙六

などいふのも出来たのであります。

(六) かるた 是れは西班牙語で(英語のカード)足利時代の末、彼の商船の來ました頃、舶來した物で、もとは今のトランプの樣にとつたのです。然る所寛永年中天草騒動の時から、耶穌教を禁ずると共に、斯様な舶來品をも所持する事を忌みましたから、トランプの類は一切廢れて、(其頃の品今もたま／＼残つてゐますか今のトランプの樣なキングや兵士の象がかいてあります)其の札に歌をかくやうになつたのです是れはもと中昔に貝合という遊技があつて、貝の中に繪をかけたのが始まりで、歌などをもかいたのが、一變して白かやうな形の札に、歌の上下の句を別々にかいて、その上下を合はせる遊技が行はれ、之を歌貝と名づけた。それが又一變して彼のかるたの紙に歌を

かき、上の句を讀んで下の句の札をとる事となり之を歌がるたと名づけたのであります。此のかるたと雙六との起原沿革は、別に考證して書いた事もありますから、それに譲つて爰では精しく申しませぬ。

(七) でん／＼太鼓 是れも古くからあるもので、もとは雅樂の樂器であつたのを、簡略に製して玩具にしたものと見えます。其の名を昔はフリツヅミ(振鼓)と申して、例の千年も前の和名抄といふ本にあります。又榮花物語に後一條帝の御幼稚にわたらせられた時、御愛玩なされた事が見えてゐます。今のでん／＼太鼓は、ホシノ赤子の遊びであるが、昔は五六才乃至七八歳位の者まで、玩んだものゝ様です。

(八) 風車 是れも昔は赤子でなく、もはや六七歳

になつても、玩んだ様子です。長谷寺観音殿記といふ書物に、鳥羽院の御代に此の寺に法師丸といふ小童があつて、幼き時父に死別れ、貧しき母の手一つで育てられたが、七歳の時同じ年頃の小童七八人集り、面々風車を持って遊んで居たに、此の法師丸には作つてやる者がなく、子供心で欲しがつて、母にねだつた事がかいてあるので、その様子も時代も分かります。

玩ひ物の話は是の位にして置いて、次には玩具なしにする遊技の事をも少々申し述べましよう。

(つづく)

結婚論

野 本 生 譯

結婚は、青年者にとりて、極めて、重大なる事柄で、結婚期に達せる人々の、充分に、之が解釋

をして置かねばならぬ處の重要な問題であらうと思ふ。或る青年の中には、人は、一女子を選定して、衷心より之を愛し、後、娶りて、目出度き生涯を送るのであるといふ、一般、小説にありそうな、頗る、手輕き解釋をして居る者もある。又其を、一大疑問として、徒らに、感情の上から、種々、疑惑を起して、苦んで居るものもある。併し、何れにしても、何の様なものが、果して、善良なる婦人であるか。結婚の方法は、どうすればよいか。又、其の、年齢は、如何に、定むべきものなるか。此等、何れかの點に於て、疑を生ずる事は免れないのである。最初、一人の女子を認めて心に適へりと思ふも、後に至り、必ず、其の女子を娶るといふ人の、極めて、少いのを見ても、此等の條件が、多數の青年者にとりて、頗る、重大



なる事柄であることが分かる。

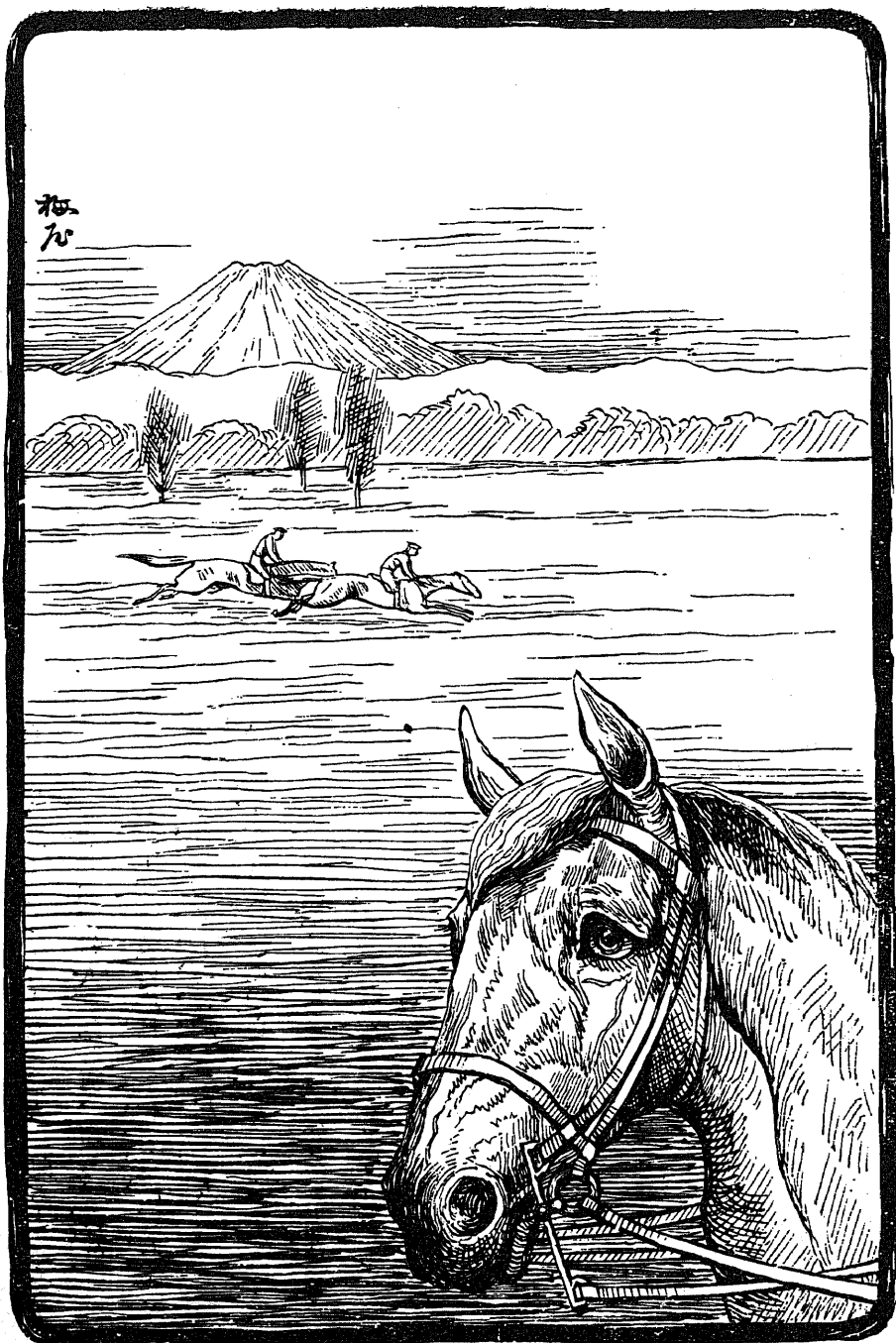
偕て、今、此處に、第一に、述べんとするのは結婚に關しての原理である、即ち、結婚は殆ど、凡べての青年者にとりて、幸福を得んが爲めなる事を、説かんとするのである。結婚の、人生にとりて、幸福であることは、誰しも、異存の無い筈である。勿論、特別の場合に於て、單獨なる生活を選ぶ人もあるが、其は、何故に、獨居を爲すのがよいかといふ、事實明白なる道理が、あるからで、現に、予が知人に、多年、家内の風波を厭ひて、斷然、獨居を決定した者がある。斯かる決心は、時として、人をして、大事を成さしむるといふやうな、場合がある。其の外、種々なる境遇、事情に迫られて、獨身で居るのが、却て、惻いであつて、分別に適ふて居るといふやうな場合もある。又、

或る人々の中には、高潔なる、無限の尊敬を以て婦人に對するの餘り、神意によりて、當然、男女相互に、負擔すべき、現世の勞苦を、婦人に限り之れを負はしむるに忍びない、といふので以て、獨居をなすものもある。而も、此種の人々は、實際、今日、いくらも、あるのである。併し、多數の人々にとりては、首尾よく、結婚をなして、平和なる人生を送るのが、元より、當然なのである。青年の人々が、若し、從來、一般に、婦人に歸せられたる、諸種の性格の、有無を疑ふ爲、或は、單に、女流に對する信念の、缺乏せる爲に、結婚を否定するより、他に、物質上、若くは又、心意上、何等の源因を認めずして、徒らに、獨居を企てたならば、最初の計畫が、如何に巧妙であつても、其の生涯は、必ず、大なる失敗に了らなけ

ればならぬ。何となれば、今日、世界に於ける、最大なる幸福は、善良なる、一婦人を信じ、衷心より、深く、是を愛し、家庭に入れて、以て、婦人に對する信念を、現實に表すのに、あることは争ふべからざる、事實であるからである。即ち、圓滿なる人生の幸福は、眞實なる一婦人を、選定して、是れを、愛するより、初めて、生ずるので、開關以來、人生歴史の一端を繙けば、此等、斷定の、果して、誤なき事がわかる。實に、男子は婦人なくして、何事をも爲し得ないのである。一度婦人を除きて、孤立の地に立たしめば、彼れは、全く、意氣地なき、可憫なものとなり果つるのである。如何なる男子も、如何にして、自己を取締るべきか又如何にして、自己の身邊に、注意すべきかを知らぬのである。其は、妻の留守中が、よ

く、之れを、證明して居る。即ち、妻の方が、如何程、重、且、大なる部分を、其の家庭、及び、良人に對して、占めて居るか、といふことが、分かる。善良なる妻は、其の良人を慰藉するに、必須なる事柄を、良人、自らが、知るよりも、更に一層、よく、心得て居る。男子は、病魔か、自己を襲ひつゝあるをも知らぬ、而も、愈々、襲はれてから、そこで、始めて、大騒ぎをする。已に遅いのである。併し、婦人は、そうでない。先づ其の兆候を看破して、良人の爲めに、豫防策を、講ずるといふ、有様で、其の眼光の、靈妙なるとは、時として、良人、自ら覺らざるに、早く已に其の不快なるを看取して、却て、之を良人に告ぐるといふ程である。人は云ふ、婦女子は、業務に暗しと。然れど、人、業務に従事して、苦痛を感

梅  
元



ずる時、其の慰藉の源となるは、善良なる妻ではないか。良人、失意に沈む時、猶、固く、前途に期望を有して、良人を鼓舞するものも、亦、妻ではないか。妻は、實際に、手を下してなすよりも其の感化、刺衝によりて、良人をして、新たな希望と、勇氣とを生ぜしめ、更に探るべき方法を、考查、指示する點に於て、良人を助くることゝが、遙かに多いのである。又、人、業務によりて苦惱を感じ、若しくは又、失意、落膽に遭遇せるの際、世人の知り得ざる、一種、微妙なる、婦人の心盡によりて、容易く、其の煩悶の裡より解脱し得たること、幾何であらう。結婚、果して、失敗に了るべきや、否やは、實に、此の隱微なる、婦人の心中を、知盡せる人々にのみ、問ふべき事柄である。

世人は、不幸にして、未だ、婦人を知るといふ點に達して居らぬ、婦人を知る事、即ち、適當に、婦人を理解し、彼女の心情を解釋するは、人生の教ふる、深遠なる教課に屬して居る。人が、一婦人を得て、純精、無垢の心を以て、之れを愛し、母と呼び、妻と唱ふるに至らば、始めて、其の妻と呼び、母と唱ふる言葉の、眞意を理解することゝが出来るのである。婦人が、男子の生涯に對して其の貢獻する處、斯くも大なる事を思はば、何人も、決して、婦人を拒むことが、出来まいと思ふ人、若し、此の世界に、已を以て、最も怜悯なりと信じ、天上の星よりも、更らに猶、麗はしき眼を以て、來り迎ふるものゝあることを知らば、又己が足音にも喜びて、其の小さき胸を轟かし、常に勞苦を分ち、成功を祝する、やさしきものゝ、

あることを知らば、又、更に、歡樂には已れと其に笑ひ、憂苦には、其の柔く、愛らしき雙腕を、已が、身邊に纏ひて、慰藉し、鼓舞し、以て、心氣を清涼ならしめ、未だ、俄かに、浮世の、棄つべきにあらざるを悟らしむる、優しく、愛らしき一婦人のあることを知らば、其の嬉しさ、悦びしさは、果して、何であらうか。既に、世人の、知れる通り、此は、決して、一場の想像談ではなく現に今日、此米國は勿論、其他、諸邦の家庭に於て、其の實例の澤山が、實際、行はれつゝあるので、其處では、夫妻、共に圓滿、幸福なる生活をして居るのである。

(未完)

## 鬼遣ひ(節分の儀式)

せ　く　生

本年の節分は二月四日にして、朔風凜烈たる大寒は正にこの日に盡さ、其の翌日より「立つ春」とて、春陽和氣の天地萬物に表はるべき筈の日なれば、民間にては一般に面白き儀式を行ひて、各自の幸福安全を祈る事あり。是れ即ち鬼遣ひにて、鬼遣とも追儼とも又草に儼ともいひて、我が國古來年中行事の主なるものゝ一とせり。其の初まりしは中々遠き昔の事にて、今日までには幾度かの變遷をへたるものゝ如く、其の由來頗る入り組みたるなれば、今こゝに少しく其の梗概を記さん。

## (一) 當日の儀式

今日主として行へるは、(一)室内にて大聲に「鬼は外福は内」と叫びつゝ、いり豆を撒く。(二)室外の戸口などに鰯頭と柊とをさし置く。さてこの大豆などは何故に此の式に用ゐられしかに就いて

は、夫々こじつけの解釋なきにあらねども、畢竟一として必然的の因縁ありて然るに非ず。只上代よりの言ひ傳へ若しくは何かの聯想より來りしもの過ぎざるべし。但し豆は「魔滅」といふ義より用ゐ、柘は其の葉の「鬼の目をつく」など申すが如何にも恐しさもの、又魚頭は甚しく臭氣あるより流石の鬼も恐れ入りて之を避くべし等思ひて用ゐたりといふべきか。

(二) 儼の起原

追儼の事は實に唐土より傳はりたり。彼の土には夙に此の式ありき。論語の郷黨篇に「鄉人儼朝服而立於阼階」などあり。我が推古の朝初めて彼の土と通ぜし以後、唐朝との交通年々に頻繁となりて既に彼等の風俗を知り萬事彼を模範とせる當時、何として獨りこの儼を眞似さるべき。然かも恰

も之を眞似るによき機の來りしといふは、文武天皇の慶雲三年の事なりき。この年諸國に疾疫流行して百姓多く死したりしかば、其の十二月大に儼ひしたるを以て我が國に於ける追儼の初めとすこれは禁中にて行はれし事なれば、上のなす處忽ち下に流行して、儀式の如きも一般に禁中のに形りたるべければ、今茲に延喜式及び内裏式によりて、其の模様の一斑をしるさん。

「凡そ年の終に追儼す。當日戌の刻(宵八時)中務省の官人追儼の舍人等を率て、承明門の外に候し、省の處分を待ちて、宣陽、承明、陽明、玄暉の四門に頒配せらる。亥の刻(十時)舍人門に叫ぶ。其の詞に、儼子人等率て參入る某官親王門に候ふと申す。即方相を首として親王已下次に隨て入りて中庭に立つ此の時陰陽師齊部を率て奠祭し訖て方

相先儼聲をなす、即戈を以て楯をうつ。如此する  
事三遍群臣相和して以て惡鬼を逐ふ。親王已下桃  
の弓葦の箭桃の杖を執て儼ひ四門を出づ。云々」

(三) 追儼を節分に行ふ事

附其の式に變遷ありし事

初追儼は唐土にても「金吾除夜進儼名」とある如  
く、我が國にても必ず除夜即晦日に行ひ來りしを、  
何時しか節分に行ふ事となりぬ。是れ何の事情に  
よりて何時頃より斯くなれりしかを知るに由なけ  
ども、晦日と節分とは一は天運一轉せる年度の  
變り目、一は期節の變り目にして共に天地人三界  
に一大變化の現象を與ふる處より斯くは變移せし  
ものならん。彼の日次記事に「山城菩薩池の良の  
隅に貴布禰社を祭る。相傳ふ寛平年中疫癘盛に行  
はれし時、神託によりて此處に貴船神を勸請せり。

節分夜神輿を昇さて池邊を巡る。其後豆を升に入  
れて四方に撒き疫鬼を追ふ。今に豆塚升塚の名わ  
り。豆塚或は魔滅塚に作る云々」とあるより考ふ  
れば寛平頃より朝廷に近き山城に於いて節分の夜  
に豆を用ゐて疫鬼を追ひ散らしたるなれば、従前  
の除夜の追儼に聯想して其の式を合併し、一層其  
の式を盛に行ひたらん事は、如何に今日の如く經  
濟的處置を崇ばぬ時代なりとも、爲兼ねまじき事  
なるべければ多分此等の事情より節分となり又豆  
をも用ゐ初めたるなるべし。「なよし」(後編を用  
ゐる) 移をさす事は既に平安朝の頃より行はれ  
たる事土佐日記(元日の處に合せ記す)に見ゆれど  
も、大豆を打ち及び節分に行ふ事となりしは足利  
時代の臥雲日録に「文安元年十二月廿二日明日立  
春故に昏景に及び室毎に熬豆を撒す。因て鬼外福

内の四字を唱ふ云々」とあるが物に見えたる初なるらん。

尙追難の際に鼓を用ゐし事ありしは、榮花物語月の宴の巻に「みかど冷泉下りさせ給ふとのゝしる。安和二年八月十三日なり。御門下りさせ給ひぬれば、東宮(圓融)位につかせ給ひぬ御年十一なり(中略)例のありさまでもありて、はかなく年もくれぬれば、今のうへ(圓融)わらはにははしませば、晦の追難に殿上人振鼓などしてまいらせたれば、うへふりけうぜさせ給ふもあかし」とあり。又文安百首の歌にも「九重の雲の上よりやらふ難のおとにもなふ振鼓かな」とあり。是れ多分支那の書に「鞀鼓驅疫」或は「逐惡鬼鼓吹」などあるによりあるまでにて只一時の流行に止まり何時しか行はれずなれり。

(四)追難に關する子供の質問

七十

子供は其の年齢相應に何かにつけて、色々の質問をなす者なれば、其の機を外さず其れを利用して有益の智識を與へ善道に導く事は、其の教養の任に當れる教師父母兄弟に向て尤も望ましき事ならずや。これ只其の正當の欲望を満足せしめて彼等を喜ばしむるのみならず、之が爲に強き記憶を養ひ、教育の上に大なる効果を加ふるものなればなり。然るを一概に追難などは「彼は上古未開の人の遺風なり。迷信の所爲なり。つまらぬ事の骨頂なり。何の譯もない事よ」と一氣に斥けて其の由來さへも語らずして子供の失望を顧みざるが如き高襟連は共に吾人の語るべき人ならず。凡そ之に類して古來行はれ來りし民間の儀式は頗る多く、中には實に馬鹿々々しき事もありて今



日は既に廢れたるあり、又廢れんとしつゝあるも  
 あれば之を行ふには其の取捨撰擇元より必要なり  
 而して彼の孟蘭盆會の如きは殆ど今日の大祭日と  
 同性質のものにして、毎年一回つゝ古き記憶を呼  
 起して己を反省する期を定めたるなれば精神修養  
 上にも欠くべからざる事なり。即ち公に春秋皇靈  
 祭あると一般、民間一家の靈祭なれば十分慎重に  
 之を行はんことを望ましけれ、追儺の事情は元より  
 異なれども凡て斯る考もて之に對せられ、尙子供  
 等と共に團樂して(一)桃太郎の捕へし鬼。酒頭童子  
 の話。疫病を拒ぐには如何にすべきか。本年は病  
 の此の家に這入らぬ様にせん。(二)豆につきて年齢  
 の勘定。(三)豆に就いて理科の上の話(三)昔大椿は熬  
 豆で勉學せり。(話さしむ)徂徠先生の豆腐糟で勉  
 強した話。(四)杉崎等についても相應に話の種あ

り。此等を語り合へば、飛び込む福の勢は必らず  
 や内なる鬼を外にせん。

鬼すらも都の中さみのかさを  
 めぎてや今宵人に見ゆらん

